



柳家花緑とふれあう会

落語家の柳家花緑さんが6月9日(火)に来島されサギ・セミナー・センターにおいて今回で4回目となる独演会を開催されました。約230人の島民を力のこもった話芸で、笑いの渦に引き込む、すばらしい独演会でした。

第26回トリアスロンさぎしま大会 選手参加申し込み締め切る

トリアスロンさぎしま大会の参加者を4月13日より募集していましたが、6月9日で受付が締め切られました。当初尾道しまなみトリアスロンが2週間後に開催されるということで心配していましたが、中止になり多くのアスリートの皆さんの応募がありました。

今年度応募者は次の通りです。

	定員	応募者数
個人	400人	569人
リレー	40チーム	49チーム

トリアスロンさぎしま大会は島民が一丸となって行う、あたたかみのある大会として大変好評です。

今年度も皆様のご協力をお願いいたします。

東日本大震災復興支援チャリティー事業 Tシャツを買って震災遺児に愛の手を!

実行委員会では昨年に引き続き、社会貢献の一つとして復興支援チャリティー事業「せとうち筋プロジェクト」を実施しています。オリジナルのチャリティーTシャツを製作・販売し、その販売収益金を東日本大震災遺児支援の「桃・柿育英会」に寄付いたします。ぜひ皆様のご協力をお願いいたします。

- サイズ : S、M、L、LL
- カラー : ターコイズブルー
- 価格 2,000円
- 取扱 鷺浦コミセン ☎ 87-5004

7月町内行事予定

- 12日(日) リフレッシュ瀬戸内(佐木 長浜海岸)
- 12日(日) 第9回三原市民グラウンド・ゴルフ大会
- 24日(金) 第2回トリアスロン実行委員会

第16回町内グラウンド・ゴルフ大会

6月7日(日)第16回町内グラウンド・ゴルフ大会が向田扇浜グラウンドで開催されました。晴天に恵まれ町内から26チーム、162人が出場して競いました。日頃の練習成果を発揮して楽しい1日を過ごしました。

成績は以下の通りです。

個人の部	
優勝	坂本 光廣
準優勝	船附 積
第3位	山根 宗光

団体の部	
優勝	ペガサス(向田)
準優勝	浜っこチーム(佐木)
第3位	小梅ちゃん(向田)

鷺浦コミュニティセンターだより

双鷺洲

発行
鷺浦コミュニティセンター
電話/ FAX: 0848-87-5004
Eメール: sagiurac@mail.mcat.ne.jp

鷺浦コミセンからのお知らせ

平素より町内の皆様におきましてコミセン活動にご理解とご支援を賜りまして厚くお礼申し上げます。

さて、この度、中央公民館を中心として旧市内コミュニティセンターでは、戦後(被爆)70年の節目の年に平和学習の一環として、「70年目の夏」未来へのメッセージ・イベントを計画いたしております。鷺浦コミセンも参加いたします。つきましては、コミセン内に案内チラシ、メッセージを書いていただく手形用紙、ボードを用意していますので、この機会にたくさんの方の参加をお願いいたします。

募集期間

場所 鷺浦コミセン
募集期間 7月1日(水)～7月30日(木)

俳句・短歌

- ・ 口いっぱいあけて餌を待五のつばめ
 - ・ あじさいの美しく咲き鮎はねる
 - ・ 真打ちや笑ひを束ねて梅雨払う
 - ・ せせらぎに神秘の世界や蛍狩り
 - ・ 川土手に茅花(つばな)流しの道祖神
 - ・ 村時雨でもと触れ合うアンブレラ
 - ・ 枯れかけた孔雀サボテンただひとつ
 - ・ 蓄ふくらみ見事に開花
 - ・ 対話をし、よかぬ評価耳にする
- あかんたれ
ぶんか
一草
牡丹
- 人の口には戸はとぎされず

1年間の成果と今後の展開は

ふるさとという最前線第6期生が「島かえりツアー」で報告

しまのわからはじまった、東京藝術学舎ふるさとという最前線第6期生のかかりが1周年を迎え、6月20、21の両日、島かえりツアーと名づけて12人が訪問し、2日間にわたり交流を持ち、これまでの成果と今後の展開について意見交換をおこないました。

コミュニケーションデザイナー

の山崎亮さん(Studio-L 代表)の講座で提示された佐木島が抱える課題に対し、7つのチームが生まれ、この1年間、多くの方の協力をいただきながら、島内外で活動を展開してきました。

とくにフォトコンテストで集まった写真は、フォトブックになり、いつでも見られるだけでなく、作品は佐木島の魅力を伝える素材として、多方面に活用されはじめています。



報告会の様子



旅行者に島の方のメッセージが届くポストカードは、メッセージを書くことで「自分の島に対する思いを再認識した」という言葉をもらいました。

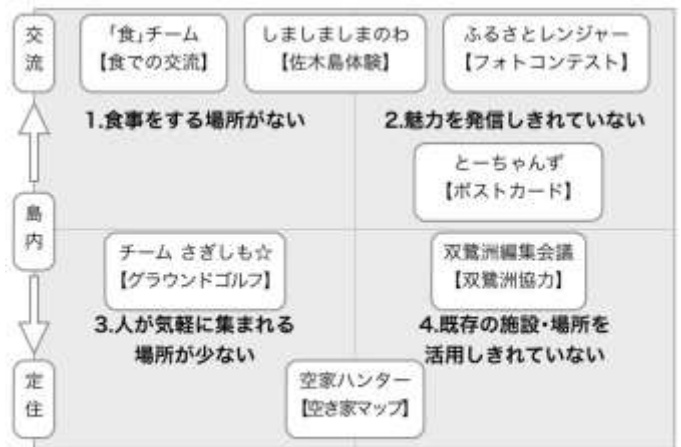
23名の参加があった体験ツアーやかんきつ収穫手伝い、食での交流やグラウンドゴルフへの参加など受け止めていただき様々な交流を生み出されました。

受け入れ体制があったからこそ 今後は離れていてもできる体制づくりを



2日目の交流会の様子

また、今後の取り組みとして、インターネットを使った空き家マップの活用など、離れていても島の方々とのやりとりしながら出来る活動も提案。行政からの参加もあり「受け入れ体制が整っていたからこそこうした継続があったのでは」と評価されました。



島の課題と各チーム【各活動】の位置づけ

宮本常一と佐木島



(5)横に手をつなぎ、深みをもって

「今日の観光というのは、連れて行かれる観光なんです。なかなか景色がいいと、そこへ連れて行ってもらうって、転々と変わっていかなきやいかん。しかも時間に合わせてバスが動く」。

民俗学者宮本常一は、昭和四十九(一九七四)年の全国離島振興推進連絡委員会総会での「後継者の育成と推進員の社会的使命」という講演でこのように語ります。真に人がつながっていく観光はどのように生まれるのでしょうか？

皆さん自身のご先祖がその島で築き上げていった文化財、生活の糧にしたもの、それには非常にレベルの高いものがたくさんあるはず。たとえば人が一番喜んでみているものは何だということ、(中略)人の営みなんです。(中略)つまり自分が生きていくために何らかの関わりを持つものを吸収したがつているんです。身をもって体験したがつているんです。

「それを見なければ、その島のことにはわからない」。そうしたものを見出すことだと宮本常一は言います。その手段として史跡や民俗博物館の充実が挙げられていますが、ただ一人の取り組みでなく、目覚めていく者がまず周囲に働きかけて、お互いが横へ手をつなぎ、どこで何をやっているかということがわかるようなシステム、あるいは場当たりのものでなくて、それがもつともつとある深みをもって体系的に育てられていくことが、いま島には一番必要ではなからうかと思うんです。

人の営みを軸にここでしか味わえない体験が宮本常一が考える真の観光なのでしょう(以上)「宮本常一講演集4郷土を見るまなざし—離島を中心に」(農文協、2014)より。(つづく)